
LIFE AFTER DEATH ～死後の人生～

小野 大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L I F E A F T E R D E A T H 〈死後の人生〉

【Nコード】

N 2 6 8 6 Z

【作者名】

小野 大介

【あらすじ】

三十路を目前にし、立花 麗子はリストラで会社を辞めた。大学時代からの恋人には浮気を告白され、しかも妊娠を理由に別れを告げられる。

絶望し、自殺まで考えた麗子だが、なんとか思い留まる。しかし、そんな彼女に降りかかる不幸。その結果、滑って転んで頭を打ち、あっけなくも死んでしまった……。

屍と化した麗子の元に歩み寄る黒い影。それは言った。

「もしもし、聞こえますか？ もしもーし！」

それは幼い姿をした死神だった。名は命。幽霊となって目覚めた麗子に彼は言った。

「立花 麗子さん、死神という仕事に興味ありませんか？」
スカウトされてしまった……—。

(1)

とあるマンションの一室。

玄関すぐ横の洗面所から、シャワーの音が絶え間なく聞こえてくる。

曇りガラスの扉の向こう——湯気が充満したバスルーム。

バスタブに、一人の女性が全裸の状態で横たわり、熱めに設定されたシャワーを頭から浴びている。

控えめに染められたダークブラウンの髪が濡れて、肩から胸元にかけてペタリと張りついている。

華奢な身体を伝い流れる湯。栓が抜かれているのでバスタブ内にたまらず、小さな渦を描いて排水溝に流れ込んでいる。

彼女は、その渦を、虚ろな目で見つめている。

微動だにしない瞳。……けれど、ふいに動き、あるものを見つめた。

それは、自らの右手が握りしめている一本のカミソリ——。

非常に薄い刃が取り付けられているそれは、化粧用のカミソリだ。彼女はおもむろに右手を動かし、カミソリを、太ももの上に置いた左手に運んだ。

見るからに鋭利なその刃を返し、手首に近づける。

近づける……近づける……。

目は虚ろなまま。その表情には、感情が見られない。自らの皮膚に刃を押し当てようとしているのに、不安も、恐怖もなくて、まるで生きる屍である。

——しかし、

プルルルルッ！ プルルルルッ！

突然、曇りガラスの向こうから機械的な音が聞こえてきたかと思

えば、虚ろなその目に光が宿った。とたん、彼女はハッと、びくりと肩を揺らした。

「つうっ!？」

直後に声を漏らし、その身と顔を強張らせた。

動いた拍子に切ってしまったのだ、左手首を。見れば、小さな傷が斜めに走っている。わずかに開いた皮膚の間から、赤いものがじんわりとあふれ出した。

血を認識した瞬間、ズキンッ、と痛みが走った。それが彼女に感情を与えた。

怒り。

「クソバカッ！」

目を見開き、両眉を吊り上げたかと思えば、感情のおもむくままに声を荒げて、右手を振り上げ、カミソリを投げた。備え付けの鏡に小さな傷を残し、床に落ちた。

左手首をすぐに口元へと運び、傷をなめ、血を吸う。

あふれ出し、筋状に流れていた血液だが、彼女が身体を起こした際に当たったシャワーですぐに洗い落とされた。

左手首を口元へ押しつけたままバスタブを出ると、右手を伸ばしてシャワーを止めた。床にあるカミソリには見向きもせず、すぐにバスルームを後にした。

洗面所、また右手を伸ばして純白のバスローブをひったくり、素早く羽織った。

まだ出血しており、触れた袖口が赤く染まった。

濡れた髪をそのままに、足早に洗面所を後にする。玄関から続く廊下を奥に進み、その先にあるリビングを目指す。

プルルルルッ！ プルルルルッ！

その間も、例の音は鳴り続けている。彼女はその音をたどるように、奥の棚へ移動した。その上には電話機がある。

赤くにじんだ袖ごと左手首を、凹凸おうちつの乏しい胸に押し当てつつ、苛立たしそうに受話器を取ろうとする。だが、髪がぐっしりと濡れているのを思い出し、代わりにスピーカーホンのボタンを押した。点灯したのを確認し、話しかける。

「もしもし、立花ですが――」

『――麗子れいこ！ やっと出た！』

女性のもものと思われる大声に遮られた。思わず目を細めてしまう音量だ。

『ちよつとアンタツ！ 携帯、マナーモードにしてるでしょ！？』

何回かけても出ないんだから！ まったく、なんの意味の携帯よ！』

口調だけでも不機嫌だとわかる。

「なんだ、絵里えりか……」

電話の相手は知り合いのようだ。それがわかると、彼女は一息ついた。

『なんだとはなによお、私じゃあ不満？』

「いや、別に不満ってわけじゃないけど……」

『けどってなによお、けどって。含みのある言い方ね』

「ああもう、めんどくさいなあ……で、なによ？ なんか用なの？」

『用があるから電話してるんじゃないの！ ……麗子、アンタ、会社辞めたって本当？』

相手の声に若干の重みが増した。

「……ええ、本当よ」

彼女は、一拍間を置いて答えた。

『なんで！？』

「な、なんでって……一身上の都合によりってやつよ」彼女は苦笑を交えて答えた。

『……怒るわよ？』

静かな怒り。

「わ、わかったわよ！ ほら、うちの実家って農家じゃない。私、けっこう遅くに生まれたしさあ、それに一人っ子だし。両親ももう

年で辛いみたいだから、面倒見てあげなきゃいけないって思ったわけよ。だから！」

人は嘘を吐くとき、無意識に右斜め上を見上げてしまうというが、彼女は、今、まさにそうしながら答えている。

『……本当にい？』

声だけでも疑っているとわかる。

「本当もなにも、嘘つく意味ないし……」

『……………ハァ。いいわよ、そういうことしておいてあげるわよ。言いたくないんでしょ？ だったら、無理には聞かない。言いたくなったら言いなさいな。愚痴ぐらいはいくらでも聞いてあげるから。独りで抱え込んだじゃダメよ』

「うん……あんがと……」

彼女は俯いて、消え入るような声を漏らした。

『ちよつと、なんて声出してんのよ、アンタらしくない……！ あーもう、話題変えよ！ えーつと……あっ、そう！ あれ！ 彼氏とはどうなのよ？ このところ仕事が忙しくて会えてないって言うけど、あれからどうなのさ？』

「真……？ 真とは昨日会ったよ。いつものカフェでお茶した」
彼女は微笑みを浮かべた。

『あら！ あらあらあら！ そう、良かったじゃん！ ……で？ 会社辞めたこと、もう言ったの？』

「あー……いや、ううん、それはまだ……」

『そう……早い方がいいわよ。言いにくいかもしれないけどさあ』
「うん、そうだよね……」

『あっ、そうだ。そのときに、ついでにプロポーズしちゃったら？ 会社辞めたついでに家庭に入っちゃうのもいいんじゃない？ 今なら寿退社みたいなもんだし』

「アハハ、それもいいかもね」

『待っていてもダメよ、今の男は草食なんだから。それに、今は女からプロポーズをする時代なんだってよ』

「なるほど。考えてみようかな——」

そのとき、スピーカーの向こうから、ジャアーツ、と水の流れる音がした。

「——ちよっ、アンタ、今どこにいの……?」

『どこって、トイレに決まってんじゃん。じゃなきゃ、こんなに長い間、私用電話なんかかけられないわよ』

「汚いなあ……」

『清潔ですう! ——あ、ところでさあ、もうすぐ定時だけど、今日飲みにいかん?』

「えっ、今日……?」

『大丈夫よ、聞かないから。気晴らしに飲んで騒ぐだけ。いつものところこうよお、美味しいのどぐろ出すところ! その後、ちよっと前に見つけたニューハーフの店に行つてさあ、オッパイ、揉んじゃおうぜえ!』

嬉々とした声。

「セクハラ親父か、アンタは……」

彼女は呆れた顔をした。

『ねえ、行こうよお。一緒に二日酔いになって苦しもうぜ!』

「どんな誘い文句よ……うん、わかった。いいよ、行く」

『よっしゃ! じゃあ、居酒屋で待ち合わせね。後に着いた方が、ボトル新しいの開けるのよ』

「え、それって、私の方が有利じゃない?」

『だから、おごつてやるって言つてんのよ。察しなさい。あ、でも、ボトルだけよ』

「わかってるわよ」

『ハハハッ。じゃあね』

「うん、じゃあ……」

『ブツン。ツー、ツー……』

スピーカーから電子音しか聞こえなくなると、右手を伸ばし、一度受話器を取つてすぐに戻した。……音が途絶えた。

とたん、棚に手をつき、寄りかかった。前かがみになり、大きなため息を吐き出した。

「……いっそ愚痴っちゃった方が楽だったかなあ……」

彼女はぼつりと呟いた。胸に押し当てていた左手を離し、見る。赤黒く染まり、汚れた手首。それなりに出血したようだ。すでに血は止まり、固まった血で傷口もふさがっている。

それらを見つめ、彼女はホッとした。……だが、一転。安堵していた目が凄みを増し、再び怒りに満ちた。

「なにを考えているんだ！ 私は！」

声を荒げると、同時に右手を振り上げて、目の前の壁を拳で一撃した。

「バカ過ぎる……意味がわからない！ こんなこと、するなんて……！」

憤慨している。

荒々しく自分を貶したかと思えば、また一転。今にも泣き出してしまいそうな顔をし、壁を叩いていた右手で後ろ髪をぎゅっと握り締めた。

絞り出された水滴がフローリングに散乱した。

「……………出かける用意しなきゃ」

長い沈黙の後、バスローブの長い裾で落ちた水滴を拭いつつ、きびすを返した。

来た道を引き返す。その際、道中に落ちていた水滴も拭った。

「これ、さすがに無理かなあ……」

洗濯機の前でバスローブを脱いだ。右手で掴み、放り込もうとするが、ふと思いつき留まる。赤く染まった胸元を見つめ、残念そうな声を漏らした。

洗濯機に入れるのをやめて、横にあるゴミ箱に突っ込んだ。

開けっ放しにしてあった扉をぐり、再びバスルームへ。落ちているカミソリを拾い上げると、バスローブを突っ込んだゴミ箱に投げやった。

扉が閉められてまもなく、シャワーの音が聞こえてきた。
「いったあつ！　しみるうゝ……！」
そして、声も……。

(1) (後書き)

いかかでしたか？　楽しんで頂けましたら、幸いです。
様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら
助かります。あと、とっても嬉しいです。

(2)

昨日――。

前夜、めずらしく深酒しなかったので目覚めがよかった。遅刻の恐れがある時間に起きずに済み、顔がむくまなかったので化粧のノリもよかった。余裕があったので、朝のニュースの占いを見届けてから家を出られた。運勢が悪かったのが残念なところだ。

今日は晴天。空は高く、澄んでおり、清々しい朝。

信号に一度も引っかからず、駅に着けた。ちょうどホームに電車が入ってきたのでスムーズに乗り込めた。

ラッシュはともかくとして、会社までの道中、気分が滅入るようなことは起きなかった。ガムを踏まず、段差に躓かず、ヒールも折れなかった。

久しぶりにいい出勤だった。今日はきつといいことがある、そう思える朝だった。

「おはようございます！」

たちばな立花 れいこ麗子は、扉をくぐると、すぐに元気よく挨拶をした。先に出勤し、すでに各々のデスクにいた数人の男女が振り返り、挨拶を返してくれた。

タイムカードを押し、自分のデスクに移動する。カバンを置き、椅子を引いて腰を下ろしたところ、「立花さん」と誰かに名前を呼ばれた。麗子はすぐに顔を上げた。声から、それが誰であるかはすでに察しており、彼女は迷わず右を向いた。

窓のそばに一台、他とは距離を離して置かれているデスク。その席に座っているのは、全体的に細く、ひよろつとした、どこことなかくたびれた顔をした男。頭に白髪が目立つ。

「課長、なんですか？」

麗子はその、よく言えば物腰が柔らかい――悪く言えば頼りない

男を課長と呼んだ。

「ちよっと話があるんだけど……今、いいかな？」

「はい、大丈夫ですが」

麗子は席を立ち、課長の元に移動した。すると、彼も席を立ち、別の方向へ歩き出す。

「奥で話をしようか」

課長は、進行方向の奥、壁とガラスで仕切られた応接間を指差した。麗子は頷き、言われるままについていった。そんな二人の姿を、同僚たちは、訝しげにチラチラうかがう。

課長が扉を開けて待っている。麗子がくぐると、彼はすぐに閉め、向かい合う形で置かれているソファアの一方に手を差し伸べた。彼女が席に着くのを待たずして、外から見えないよう、すべてのブラインドを下ろし、その場を密室にした。

一連の動作を横目にうかがいつつ、腰を据えた麗子は、（話ってなんだろう……？）と表情は変えず、心の中で勘ぐっていた。

（仕事や人間関係でトラブルを起こした覚えは無いしなあ……：自分で言うのもなんだけど、勤務態度は真面目な方だし、挨拶もちゃんとしてるし、セクハラとか、性的問題は嬉しいような悲しいような、今までに一度もなかった……あ、お見合いとか？ 前に一度あったっけ……）

麗子があれこれ想像しているとき、課長は、テーブルを挟んだ向こうのソファアに腰を下ろして向かい合わせになった。自然と意識が彼に向く。そのとき、テーブルの上にこれ見よがしに置かれてある大きな茶封筒に気づいた。

課長は、あらかじめ置かれてあったその茶封筒に手を伸ばし、ひもを解いて開けようとする。……が、ふいにその手を止めてしまった。

「……？」

どうしたのだろうかと思ひ、眉をしかめる麗子。課長はしばらく動かなかった。

ようやく動いたと思えば、手にしていた茶封筒を隣の席にやっ
てしまった。

「立花さん、あのね、そのお……」

少し前かがみになり、両肘を両膝の上に乗せて、祈るときのように指を組み合わせた。両手を口元に押しつけて、ボソボソ呟く。

「僕はね、立花さんのことを人として好きだからね……あつ、人だよ、人！ 人として。だからさあ、こんなときはちゃんと言わなければいけないと思うんだよね。包み隠さずに。うちの会社、このところ業績悪いでしょう。節約とか節電とか、かなりうるさくしていたから知っていると思うんだけどさあ、けっこうキツイみたいだね。ついにやり出したんだよね、人員削減……。ようはリストラなんだけどね。それでさあ、今、早期優遇退職というのを募っているところなんだよね……」

課長の悪い癖である遠回しな言葉に軽く苛立ちを覚えていた麗子だが、“リストラ”や“早期優遇退職”の言葉にドキツとした。

（まさか……？）

思わず、手に力が入る。

「立花さんはどうかなあ？ 会社のために辞めてほしいんだけど……って、言われたとき、辞める？」

課長は上目遣いに、麗子の目をじっと見つめた。そんな彼の目だが、左右に揺れ動いている。いわゆる、泳いでいるという状態で、動揺しているのが見て取れる。

その目に見つめられて、麗子は思った。

（うわ、そっちかあ……）

手伝えと言われるのか、それとも辞めろと言われるのか、どちらかと勘ぐってはいたが、その答えは、より悪い後者だった。

「……課長、はつきりおっしゃって頂けませんか？」

麗子もまた少し前かがみになり、今まで以上に敬語を使い始めた。「あ、うん、ちょっと遠回しだったね、ゴメン……あ、いえ、申し訳ありませんでした。——立花さん、任意退職に応じては頂けませ

んでしょうか？」

課長も敬語を使い始めた。一度、深くお辞儀をした後、求められたとおり、はっきりと自分の意思を伝えた。

自ら求めたこととはいえ、面と向かって会社を辞めてほしいと言われ、麗子は少し動揺してしまう。すでにわかっていたことだが、どうしても戸惑ってしまう。

（どうして私なんだろう……課長は、どうして私を選んだ……？）

麗子は思った。そして、考える――。

課長との関係は決して悪くなかった。とはいえ、部下と上司という関係の話でだ。友人関係ではないし、ましてや、それ以上は皆無である。忘年会などで飲み交わすことはあっても、目上であり、年上でもある課長の前で限度を超えた羽目の外し方をした覚えはないし、不用意な失言も、覚えている限り一度もない。そういった礼節に関しては重んじていた。だから、人間としては嫌われていないはずだ。仕事においても、使い勝手のいい一人だったはず。使われていて、それはわかっていた。だからこそ、解せなかった。どうして自分を選んだのか。……だが、ちよつと考えてみれば簡単なことだった。

リストラ――正しくは整理解雇。その際に選ばれやすい人間というのがある。

サバサバしていて、辞めることに執着心の薄いタイプ。

求められた際に文句を言えない小心者タイプ。

頼まれるとつい引き受けてしまう人のいいタイプ。

仕事ぶりや、給料の高い安いに関係なく、これらのタイプがまず選ばれる。とはいえ、会社にとって価値のある存在や、派遣は別だ。そもそも、派遣はそれ以前の問題である。

麗子は、どちらかといえばサバサバしているタイプだ。自分でもそれはわかっている。それに、彼女には特別秀でたところがなく、会社にとっての価値も低い。単なる正社員の一人に過ぎない。しかし、仕事ができないわけではない。特別できるわけでもないが、そ

れなりになんでもこなせてしまう。ともすれば、職を失ってもすぐに次を見つけられるだろう——と、思われてしまいがち。彼女は、そんなタイプなのだ。

麗子は自分を再確認し、納得した。鼻からため息を漏らし、ソファーに身体を沈めた。

「やっぱり嫌だよね……すぐには決められないよね……」

課長は背中を丸めて、猫背をひどくした。さらに前かがみになったことで、元々小さかったのがより小さくなった。

自分よりも細く小さく感じる課長の姿を見つめ、麗子は思う。

（人のよさが取り柄みたいなのなのに、こんな仕事、一番不向きじゃん……どうせ部長あたりにでも押しつけられたんだろうけど……この人、断れないもんなあ……そもそも、そういう性格だし、立場的にもねえ……）

麗子が務める会社にも、当然労働組合はある。だが、社の労働組合は、管理職に就いている社員の加入を認めていない。つまり、課長には後ろ盾がなく、もっとも危うい立場にいると言っても過言ではないのだ。だから、率先して行わなければ、自分の身が危うい。面と向かって言われることはないだろうが、ようするに、クビを切られたくなければ生け贄を差し出せ——と、脅迫されているに等しい。

（かわいそうに……）

解雇勧告を受けているのは自分だというのに、麗子は今、課長に對して同情している。……しかし、ふとあることに気づいた。

（……待てよ、解雇勧告を受けた人間に同情されるんだから、課長ってある意味、適任者なんじゃ……？ 怒りや反感を抱かせず、かわいそうだと思うせる。これは狙ってできることじゃない……この仕事って、トラブルをなによりも嫌うはずよね。下手に怒らせて、労働組合を動かされたり、解雇強要だとかいちゃもんをつけられて訴訟問題にまで発展したら面倒なことになるわけだし……そう考えると、課長って逸材……？ ——なーんて、なにを馬鹿なこと考え

てるんだか……)

課長にわからぬよう、そっと鼻で笑った。バレていないかチラリとうかがったのだが、あらためて課長の姿を目にしたことで、またあることに気づいた。

(あーあ、目にクマ作って……寝てないのかねえ……なんだかなあ、今にも自分が辞めるって言い出しそうな顔してる……どうしようかなあ……同情心で辞めるつもりなんか全然ないけど、こういうのって断ると後がめんどくさいだろうしなあ……少なくとも目をつけられるわ。今のうちに辞めて、退職金を多めにもらった方が得かなあ……)

「――あの、質問しても宜しいですか？」

麗子はふいに問いかけた。

「はっ、はい！ どうぞ」

課長はハッとして顔を上げた。許可するように手を差し伸べた。

「今、退職した場合、退職金とか、割り増しで頂けたりするんですよね？」

「はい、もちろんです！ 整理解雇ですからね」

課長はパツと笑顔を浮かべ、大きく頷いた。

「そうですか……」

(笑顔で答えてるし……。ハア、もういいかなあ……。会社にとって、私はいらないってことなわけだしねえ……)

少し悲しかった。少し切なかった。

「……フツ、わかりました。応じますよ、任意退職」

今度は聞こえるように鼻で笑うと、麗子は素っ気なく言った。

「えっ、本当かい！？ ……あ、いや、ごめんなさい」

課長は笑顔を強め、安堵の表情を浮かべた。――だが、無意識とはいえ、顔に出るほど喜んでしまった自分に気づき、申し訳なくて俯いてしまった。

「構いませんよ。辛い役回りを押しつけられましたね。――書類とか、記入しなければいけないものってあったりするんですか？」

麗子は字を書くしぐさをした。

「あ、うん……あ、いえ、ございます。——こちらで用意した退職願にお名前を記入して頂けますでしょうか？　ここです」

隣の席に置いてあった茶封筒から書類を取り出し、背広の胸ポケットに立てていたボールペンとともにテーブルに置き、差し出した。そして、空白の部分指し、丸く囲った。

「目を通しても？」

麗子は書類を手に取り、すでに目を通していながら、形式的にたずねた。

「もちろんです」

課長が返事をし、頷いているが、麗子は見向きもせず、じっくり、すべての項目に目を通した。

「……………これが退職願なんですね。当然ですけど、初めて見ました」

ようやく視線を上げると、麗子は苦笑した。……目は笑っていない。

「あ、そういえば、今週末、給料日でしたね。ちなみに、給料はどのなるんでしょうか？　次のが最後になるんですか？」

「そうですね、次が最後になります」

「そうですか……あつ、じゃあ、給料日過ぎてからにしようかな。一回分、給料が多めにもらえるじゃないですか」

ニヤリ。

麗子は不敵な笑みを浮かべた。

「え……」

課長の顔が引き攣る。

「……冗談ですよ。真に受けしないで下さい。切なくなりますから」
そう言うと、麗子は本当に切ない顔をした。

「すみません……」

課長は申し訳なさそうにした。

麗子は、書類をテーブルの上に戻しつつ、ボールペンに手を伸ば

した。ペン先を出して、紙面に近づける。先端を押しつけようとするが、ペンを持つ右手が急に震え出し、動かせなくなってしまう。動揺しているのだろう。自らの身体が拒んでいるのだ。

自分の名前ほど書き慣れているものはないというのに、《立花麗子》という四文字を書き終えるまでにかかなりの時間を要してしまった。書き終えると、どっと疲れてしまった。

まるで、自分の死刑執行のための書類にサインしているような気分だった……。

「ハア……。課長、いままでお世話になりました」

大きなため息の後、麗子は、自分の名前を記入した退職願と、ボールペンを差し出した。ついでに、首から下げていた社員証も。

課長は言葉なく、ただ深々とお辞儀するばかりだった。

「退職金ですが、いつ振り込まれますか？」

「ご要望があれば、給料日に振り込まれます。ただちに振り込むことも可能です」

「では、すぐでお願いします。気持ちに区切りをつけたいので。……金額が変わることはないですよね？」

「それはございません。ご安心下さい」課長はかぶりを振り、一度だけ頷いた。

「わかりました」

「他に、気になることはございますか？」

ボールペンを胸ポケットに戻し、退職願を茶封筒の中に仕舞いつつ、課長はたずねた。茶封筒から離職票などの書類を取り出し、麗子の前に置いた。

「……任意退職ですが、私以外にも候補がいるんですか？」

麗子は少し考えて、たずねた。

「ええ、まあ……」

「よかったら教えて頂けませんか？ もちろん、他言無用にします」

「……わかりました。他言無用にお願いしますね。——うちの課では、立花さんを含めた四人が予定されていました。後の三人は山田

さん。窪塚さん。木本さん……です」

課長は、ブラインドが閉め切られていて見えないはずの外を気にした。

「ああ……」

三人の名前を聞くと、麗子は大いに納得した。

それらは、うちの課でリストラされるとしたら——という想像の際に名前が上がる面々だった。例の、選ばれやすいタイプの者たちである。ただし、一人だけ例外がいた。山田である。とはいえ、選ばれて当然の人物ではある。

山田は女で、名前は沙織さおりと可愛らしいが、名前とは正反対に育つとはよく言ったもので、その顔も人柄も、可愛くはない。彼女はいわゆるお局様だ。仕事はできる人物なのだが、性格に少々……いや、かなり難がある。我が強く、プライドも高くて、敵を作りやすい。世渡りは下手と言える。麗子とも何度か衝突したことがあった。かといって、関係が悪いわけではない。だが、仕事以外の付き合いは一切なくて、仕事以外の会話もしないというだけだ。

そんな山田を、会社は疎ましく思っていた。麗子が知っているほどにだ。だが、彼女の性格上、下手なことをすれば厄介なことになるのは目に見えている。だからこそ、未だに働いている。が、今回、それをわかっていながら候補の一人に選んだということは、全面戦争を覚悟で切り捨てたいということなのだろう。

（誰か、怒らせてはいけない奴でも怒らせたかな？　もしくは、それほどまでに逼迫ひっぱくしているか……山田さんも、わざわざ敵を作ってどうするのかと思ってたけど、ついに来るところまで来たわけね……でもなあ、あの人、なんとなくなんだけど、今回の任意退職、応じる気がするんだよねえ……あの人の言葉の端々に、自分はいつ辞めても構わないっていう覚悟？　みたいな感じがあったもんなあ……この会社に対して執着していない。そういう意味では、私と似てるのかねえ……？）

麗子は、山田の冷静沈着だが威圧的に思える人相や、哀れに思う

ような言動、左目の下の泣きボクロなどを思い出しつつ、考えに更けた。

「――わかりました。ありがとうございます。他言無用にしますので」

麗子は一度だけお辞儀すると、目の前の書類に手を伸ばし、そのまま席を立った。

「デスクの私物、大切なものはないので、捨てるなり、誰か欲しがる人にでもあげるなり、ご自由に。――ありがとうございます。」

いままでお世話になりました。さようなら」
麗子は姿勢を正し、深々とお辞儀した。課長も彼女の動きに合わせてすぐに席を立ち、お辞儀を返す。彼女はそれを見届けもせずに応接間を後にした。

ついさっきまで同僚だった皆々の視線を受けながら、ついさっきまで自分のものだったデスクに移動し、自分のものであるバッグを手にした。その際、一番遠い席にいる女性の姿が目に入った。

左目の下の泣きボクロ。

彼女の、なにかを察したような悲しげな表情に気づくと、麗子はふっと笑い返した。

デスクを後にし、出入り口の扉に移動する。道中、タイムカードのことを思い出した。

「早退しまーす！」

いつぞやのように元気な声を上げつつ、タイムカードを押した。

ガチャコンツ！

これで最後となる本日の勤務時間は、一時間にも満たなかった。

(2) (後書き)

いかかでしたか？ 楽しんで頂けましたら、幸いです。
様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら
助かります。あと、とっても嬉しいです。

(3)

麗子は、最寄りの駅を目指して歩いている。その足取りは重く、弱々しい。

交通量の多い道。車線の多い道路に、幅の広い歩道。

出勤時には、サラリーマンやOLといった、同じ職種の間人ばかりが多く見られたが、今はチラホラ。いずれも焦っていたり、開き直ったような顔をしていたりする。遅刻でもしたのだろうか。中には、やる気に満ちた顔をした者もいる。

そんな通行人のことを眺めている麗子は、ふと、人の流れに逆らっているような感覚にとらわれた。皆がゴールを目指しているのに、自分だけがスタートに向かっている。

切なかった。そして、何故か少しだけ罰が悪かった……。

目指すスタート——もとい、最寄りの駅が見えてきたとき、麗子はぴたりと足を止めた。駅から視線を逸らし、横を向いた。そこは、ある店の前だった。

《ひとときの幸せ》

看板にはそう書かれてある。

麗子は、その店の外観や、大きなガラス越しに見える中の様子に目もくれず、足早に扉に近づき、開けた。

カランカラン！

ガラス扉に取り付けられたベルが音を立てた。

店内はとてもいい香りに包まれていた。焙煎されたコーヒーの香りだ。

ここはカフェ。

木の温もりと、穏やかな光に包まれた空間になっており、清潔感にも満ちている。それでいて堅苦しさがなく、落ち着いた雰囲気を感じられる。

BGMは音楽ではなく、自然の音が流されている。今日は森林風に揺れる木の葉や、小鳥のさえずりが聞こえてくる。

目を閉じると、ライトの光が木漏れ日に感じ、森林浴でもしているような気分になってくれる。

広くはないが、奥行きはあり、右手にカウンター。左手にはテーブル席が数えるばかり並んでいる。

右手に見える、磨かれた木のカウンターの奥の壁には、様々な産地の名が記されたコーヒード豆や、茶葉の入ったガラス容器、陶器製の洒落たカップとソーサー、曇りひとつないグラスがズラリと並んでいる。

そして、黒髪の男が一人。

髪を短く刈り込み、黒々とした細めのサングラスをかけているため、一見強面。

年の頃は麗子よりも年上で、30の後半から40の前半。

黒めのシャツとズボンに、コーヒード豆を連想させるような焦げ茶色のエプロンを身にまとっている。

その姿からもわかるとおり、彼は、この店のマスターである。

「いらっしやい」

扉が開いた際のベルの音に気づき、マスターは顔を上げた。その見た目にそぐう渋めの声と、そぐわない微笑で、麗子を迎え入れる。サングラスで目元は見えないが、微笑んだその顔はなかなかインディー。

麗子は、挨拶でもするように小さく手を上げた。すると、マスターが、店の奥へと手を差し伸べた。指し示す先には一番奥のテーブル席がある。彼女は軽くお辞儀すると、そちらに歩を進めた。

もうすぐ、午前10時――。

出勤や、朝食の時間帯を過ぎているからなのか、店内には客が一

人もいなかった。

麗子は、コの字型をしたソファに腰を下ろした。すると、そのままなく、マスターが水の入ったグラスとおしぼりを持ってやってきた。

それらをテーブルに置こうとしたとき、マスターは、麗子の表情が物悲しいことに気づいた。どうしたのかと気にかけていると、彼女もまた気づいて苦笑い。

「こんな時間にめずらしいでしょう、外回りでもないのに……実は、会社を辞めてきたんです。ほんとと言うと、リストラなんですけどね」
そう言うのと、麗子は肩をすくめた。

悲しい告白に、マスターは口角を下げ、つられたように悲しげな表情を浮かべる。

「……いつもの？」

マスターは、少しの間を置いてたずねた。麗子は小さく頷いた。それ以上のことは聞かず、注文を受けるとすぐにカウンターへ戻った。マスターの姿を横目にうかがいつつ、麗子はソファに身を沈める。今の気分としては、テーブルに寄りかかって額を押しつきたいところなのだが、ファンデーションが付いたりして迷惑だろうから、しない。

ガリゴリガリゴリ――。

カウンターからなにかが碎けるような音が上がった。

マスターが、煎ったコーヒー豆を挽き始めたのだ。

この店では、注文を受けてから豆を挽く。そのため、ちょっと時間にかかるが、その分、味も香りも申し分ない。

麗子はこの店の常連だ。

会社勤めて、まだ間もない頃のことだ。仕事でミスをし、ひどく落ち込みながら駅に向かっていたとき、この店の前を通りがかった。ちょうど一人の客が店を出たところで、すれ違ったのだが、そ

のとき、風に運ばれてやってきたコーヒーの芳香に誘われて、思わず足を止めてしまった。そして、つい訪れてしまった。そのとき、気分は重く沈んでいたが、マスターの入れた一杯のコーヒーを飲んだところ、嘘みたいになくなり、心も晴れやかになった。不思議とやる気が沸き起こり、またがんばろうと思えた。

それからというもの、マスターのコーヒーの虜となった。帰り道ということもあって、以来、ほぼ毎日通いつめている。

マスターが入れるコーヒーはただ美味しいだけではない。人を元気にさせる力があると、麗子は信じている。……だから、今日も。

今いる一番奥のテーブル席を、麗子は気に入っている。トイレに近いというメリットとデメリットがあることは、座る位置によって柱の陰になり、他のテーブル席が見えず、向こうからも見えない。見えるのはカウンターだけで、他の客の姿や、視線を気にせず、また、人通りの多い外の様子も見えないので、落ち着いてコーヒーを飲めるところである。この席は彼女にとって、まさに“ひとときの幸せ”なのだ。

麗子がこの席を気に入っていることは、マスターも知っていて、空いていれば、たとえ一人でもこの席をすすめてくれる。

独り静かに極上のコーヒーを楽しみ、気持ちを切り替え、午後からの仕事に精を出す。それが麗子の日課だった。……けれど、それも今日で終わりになるかもしれない。

（ああ……そういう意味では、あの会社に対して執着心があったかも……再就職、この店の近辺に勤められたらいいのに……）

麗子は遠い目をし、店内の景色を見回した。

これで見納め——というわけではないのだが、つい、そうしてしまった。

（……あ、会社で思い出した。そういえば、あの女の名前がなかった）

急に不機嫌な顔をした。

麗子が今、頭に思い浮かべているあいつ（……）とは、同じ課

の女性社員で、入社して二年目の後輩である。

顔はそこそこ。正直、自分の方がいいと思っている。しかし、その後輩は彼女には無いものを持っている。胸である。巨乳なのだ。ホルスタインと呼びたくなるようなでかさだ。女は胸ではないと言いたい、たいていの男はその胸を選ぶ。

(むかつく……!)

名の知れた大学を出てはいるが、接して見ればすぐに露見する頭の悪さ。勉強はできるバカという奴だ。

脳ミソに行くはずの栄養を胸に取られたんじゃないかと、見たるたびに思ってきた。

(巨乳女は頭が悪い——というのは迷信だと思う。でも、あいつは別だ……! 入社して二年も経つのに、未だに仕事を覚ええない! 一年目ならまだ許せる……けど! 二年目となったら我慢にも限度があるわ……! なんのために会社に来てるんだっのっ!)

仕事は覚ええないが、男の名前や経歴は見事なほどに覚える。社内も、そして外も。なにかといえばトイレで化粧を直し、同族と男の情報交換し合い、定時に帰って合コン三昧。理想の恋人や夫を探すためだけに会社に来ているような、そんな女だ。相手によってコロコロと性格を変え、男はほぼ味方につけて、女は互いに利用できる相手を確実に味方にし、山田のような人物を確実に敵に回す。あの意味、恐ろしい女である……。

(同じ女とは思えん……でも、生物学的に見ると、あれが女なのかねえ……?)

麗子は、学生時代に男らしいと言われたことを思い出し、ちょっと情けなくなった。

(私だったらあいつをまず切り捨てるけど、会社は選ばなかったわけだ……まあ、二年目で給料も安いし、男からの人気もあるし、他の会社で通用するとは思えないし……)

考えるたびに苛立ちが募る。言い訳しているような気分がする。

(なんで……? なんで私なわけ……? あいつより、私の方が断

然仕事ができるのに！　なのに、なんでっ！？）

つい叫んでしまう。……心の中で。

（意味わかんない！　気分悪いっ！　ああもう、いい！　どうでもいい！　考えない！　考えたくない！　あそこは、あいつを残すよ
うなそんなところだったってこと！　そんなくだらないところ！　そ
うよ！　そんなところなんだから、辞めてよかったのよ！　多めに
退職金もらえるんだし、さっさと見限っちゃおう！）

麗子は、自分自身に催眠術でもかけるように、必死にそう言い聞
かせている。なおかつかぶりを振り、舌打ちまでして、嫌なことを
忘れようと躍起になっている。

落ちてこうと、目の前にあるグラスに手を伸ばした。ひんやりし
た水が口に入った瞬間、奥歯に鋭い痛みが走った。

知覚過敏。

いやらしい痛みが口内を駆け巡り、頭へと突き抜けた。思わず身
震いしてしまう。

痛みが静まるのを待ち、細く息を吸って吐いた。

（とりあえず、歯医者行こう……ああ、でも、ここのお水、やっぱ
り美味しい。……あれ、遅いなあ）

しみる奥歯を舌先で舐めて温めるついでに、この店で扱っている
水の美味しさにあらためて感心していた麗子だが、ふと、コーヒー
がまだ来ないことに気づいた。

カウンターに目をやると、ちょうどマスターがやってくるところ
だった。

テーブルにコーヒーと、たっぷりのホイップクリームが乗ったパ
ンケーキを置いた。

「？」

麗子が「えっ、頼んでないけど……？」と口にしようとする、と、
マスターがそれよりも早く、「サービス」と言った。

マスターは穏やかな微笑と、コーヒーとだけ書いた伝票を残して、
カウンターへ戻っていった。

（マスター……！）

マスターの優しさに感動し、思わず目を潤ませてしまう。麗子は泣くまいと、誤魔化すようにカップに手を伸ばした。

飲むのに適した温度になっているブラックコーヒーを一口啜った。口の中にふわっと広がり、鼻へ抜ける焙煎された香りに酔い痴れる。

苦味と酸味の絶妙なまでのバランス。そして、ほんのかすかな甘味。

インスタントはもちろんのこと、ちゃんと豆を買ってきて、美味しい入れ方を調べてそのとおりにしても、この味を出すことはできない。他の美味しいと評判の店のコーヒーを試してみたが、いずれも、ここの味と魅力には勝てない。

コーヒーの美味しさに、思わず身体の力が抜け、自然とため息がこぼれた。……すると、我慢していたはずの涙が、ホロリ。

「本当は辞めたくなかったよお……」

自分にすらついていた嘘が口からこぼれる。

マスターの入れたコーヒーに素直にさせられてしまった。

「ハア……やっぱり美味しい……」

麗子は穏やかな顔をし、もう一度、ため息を吐いた。大きく、深く。

カップを置いて、ナイフとフォークに手を伸ばした。

一枚だけなのに、二枚三枚と重ねたようにふくらしたパンケーキを三角形に切り取り、上に乗っているシナモンパウダーがかかったホイップクリームをちよっとだけつけて口に運ぶ。

「うんまいっ！」

フォークを持つ手を高々と掲げた。

「マスター、美味しいよお！ 最高！ これからも絶対通うー！」

麗子は、カウンターにいるマスターに向かって言った。すると、彼は微笑み、ぐっと親指を立ててみせた。一見強面だが、実は気さくである。

ちょうどそのとき、出入り口の扉が開いてベルが鳴った。客の訪れに気づき、マスターはハツとし、素早く手を下ろした。頬をほんのりと朱色に染めながら、「いらっしゃい」と応対する。彼、実はシャイでもある。

客の注文を受け、何事もなかったように豆を挽き始めたマスターの姿を、カウンターも含めて一枚の絵のように眺めながら、麗子はコーヒーとパンケーキを味わう。

飲むたび、食べるたびに、その美味しさに身体が震えてしまう。

（この組み合わせは最強だわ……!）

飲めば減り、食べれば無くなる。しかし、手を止められない。その矛盾を楽しみながら、ごっそり削り取られたようになっていた心を修復していった。

コーヒーを飲み干し、パンケーキが残り一切れというところで、妙な音がした。

麗子はすぐに隣の席に目をやり、手を伸ばしてカバンを取り上げた。中から取り出したのは携帯電話。それがブルブルと震えている。今の音は、マナーモードにしたままだった携帯電話のバイブレーション。

慣れた手つきで操作し、誰からか確認する。

液晶画面に映し出されている名前を見ると、麗子は少し目を大きくした。

「真……」

ある電話番号と、高城 たかぎ 真 まこと という名前が表記されていた。

（え、こんな時間になんだろう……?）

午前10時12分――。

麗子は、どことなしか緊張した面持ちで通話ボタンを押した。そつと耳に押し当てる。

「もしもし……?」

『あ、麗子……? ゴメン、仕事中に電話して』

「ううん。大丈夫。真も仕事なんじゃないの？」

『いや、今、外に出てるんだよ。だから、平気』

「そう、それならいいけど……それで、なに？」

『ああ……えーっと、実はさ、大事な話があるんだよ。それで、時間、作れないかなって。その確認』

「大事な話……？ 電話じゃダメなの？」

『……うん。できれば、直接会って話したいんだ。無理か？ 仕事、忙しい？』

「あ、ううん。大丈夫。時間、作れるよ。いつでもいい。……あ、今はダメ？ 私、今、外に出てるの。いつものカフェにいるんだけど」

『あつ、じゃあ、すぐに行くよ。今、近くにいるし。すぐに行くから』

「うん。待ってる」

『じゃっ！』

相手が電話を切ったので、麗子も電話を切った。

携帯電話を手にしたまま、考える。

（大事な話……なんだろう？ なんか怖いなあ……話があるって言われて、実はリストラだったわけだし……まさか、別れ話とか……？）

嫌な予感がした。軽い悪寒を覚え、身震いする。

（でも、そんなに関係悪くないしなあ。最近仕事は忙しくて会えてなかったけど、別に喧嘩したとか、冷めてるとか、そんなんじゃないし……好き、だし……）

頬を赤らめる。

（相性も悪くない。……色んな意味で……。別れ話とかじゃないと思うんだけどなあ……でも、だったらなんだろう……？ 他に大事な話ってなにがあるかな…………お金を貸してほしいとか？ いやあ、あいつは女から金を借りられるようなタイプじゃないな。会社をクビになったとか？ ——って、それは私だし。あいつはな

いない。一応エリートだしね。独立とかも今は考えにくいなあ……
うーん、なんだろう？)

小首をかしげながら、携帯電話をカバンの中に戻した。

テーブルに左肘をつき、手の上に顎を乗せて考えに更ける。右手を皿の上のフォークに伸ばし、パンケーキの残りの一切れを口へ運んだ。行儀の悪い食べ方でパクリと頬張ったとき、頭にある言葉が浮かんだ。

(まさか、プロポーズ……？　——えええっ!?)

思い浮かんだ言葉に驚き、思わず姿勢を正す。

(……いや！　いやいやいや！　ないない！　ないっ！　……とも
言い切れないかも……。っていうか、もしそうだったら嬉しい……
かも)

口にフォークを咥えたまま、なにも乗っていない皿をじっと見つめ、自問自答する。

(大学のときからだから……もう7年。結婚かあ……うん、時期としては十分……会社をリストラされたその日にプロポーズ……？

……ありだ。このまま、主婦になっちゃうっていうのも悪くない。
リストラで、ようはクビなわけだけど、ここで結婚したら、結果的には寿退社ってことよね。不幸の後に幸運が……!?)　三十を前にして無職になったと沈んでたけど、沈む瀬あれば浮かぶ瀬あり。地獄で仏に会ったよう。人間万事塞翁が馬!)

念仏でも唱えるように、知る限りの諺を心の中で呟くと、ようやく口からフォークを抜き、パンケーキの最後の一切れを咀嚼する。

口の中に甘味が広がる。すると、顔がほころんだ。

ロマンティックなプロポーズの瞬間や、薬指に指輪をはめた自分の左手を想像したり、向こうのご両親にあらためて挨拶しなければいけないとか、純白のウェディングドレスにその身を包んだ自分の姿を鏡越しに眺めてみるなど、しきりに妄想し、酔いしれている。頭の中の世界では、すでにハネムーンを迎え、遙か彼方に旅立っていた。

「エへへ……」

表情がゆるんでいる。

そのとき、マスターが客に飲み物を出し、カウンターに戻ろうとしていた。幸せの絶頂にあり、不気味に笑っている麗子に気づいて、ハッとした。

見てはいけないものをみてしまったとたじろぎ、視線を逸らそうとしたとき、カップが空になっていることに気づいた。

マスターはカウンターに戻り、おかわりを用意するべく、コーヒーマイルに事前に煎ってあった豆を入れ、ノブを回そうとした。すると、ベルが鳴った。

見ると、扉が開き、スーツ姿の男が一人、入ってきた。

「いらっしゃい」

二十代後半と思われるその男。マスターとは顔見知りのようで、軽く会釈すると、さっと店内を見回し、奥のテーブルに歩を進めた。マスターは豆を挽くのを中断し、水を注いだグラスとおしぼりをトレイに乗せて、カウンターを出た。

男は、麗子がいる一番奥のテーブルに移動し、向かい合わせになった。

マスターも一番奥のテーブルへ向かい、男の前に水とおしぼりを置いた。

「コーヒーを」

水に手を伸ばしつつ、男は注文した。その声は、先ほどの電話でスピーカーを通して聞こえてきた声と同じものだ。つまり、彼が高城 真である。

マスターは伝票を手に取り、注文を書き記した。それを元の位置に戻すと、麗子の空になったカップとソーサー、パンケーキの皿を下げて、カウンターに引き返した。

「――ゴメンな、いきなり」

「ううん……」

二人の会話が聞こえてきたが、客の会話を聞いてはいけなないと、

マスターは聞こえないふりをし、豆を挽き始める。

ガリゴリガリゴリ。

おかげで声は聞こえなくなったが、それは豆を挽く音に遮られてのことではなく、単に二人の会話が途絶えてしまっていたからだ。

どうも、いつもと様子が違う。互いに緊張しているようで、喋り出せないでいるようだ。麗子は気まずそうにし、それでいてなにかを期待しているような、そんな表情を浮かべている。一方の男――真は、思いつめたような顔をして俯いている。

そんな二人を見守りつつ、豆を挽き終えたマスターは、二人分のコーヒーの抽出に取りかかる。

あたりに、焙煎された香りが広がる。

淹れたばかりのコーヒーを注いだ二人分のカップを乗せたトレイを手にも、再び二人の元へ向かう。

「――ねえ、電話で言ってた大事な話だけど……なに？」

マスターが二人の前にカップを置いたところ、それをきっかけにするように麗子が発言した。真も、そしてマスターも、思わず身を固める。

邪魔してはいけなないと、マスターはそそくさとその場を後にした。

「あ、ああ、それなんだけど……」

真は口ごもった。彼の言葉に期待し、チラチラとうかがう麗子。

そのときの彼は未だに思いつめたような表情をしており、どうにも様子がおかしい。想像とは温度差がある。

（あれ、プロポーズじゃない……？）

麗子がそう思ったとき、真が急にテーブルに手をついて頭を下げた。

「ゴメン！ 俺、おまえに隠していたことがある……実は、ずっと前から、麗子以外の女性と付き合ってた……！ つまり、その、浮気……してたんだ……」

真は頭を下げたまま、その言葉を絞り出した。

とたん、店内の空気がピンと張りつめた。

「え……」

そう声を漏らしたのは、麗子だった。

あまりに突然で、すぐには理解できなかった。次第にわかってきて、自分が今おかれている状況を察し、（ああ……そういうこと……）と納得した。

恋人が浮気していたなんて事実はまったく知らなかった。思ってもみなかった。まさに青天の霹靂である。そのショックは大きかった。かなりのもので、悲しい気持ちになった。残念でもあった。心が締め付けられた。ギュッと握り潰されたようだった。……けれど、少しホッとした。正直に打ち明けてくれたことや、「してた」と言葉が過去形だったことにかすかな喜びを覚えたのだ。

（ハア……違ったんだ……）

期待していたときの自分を思い浮かべ、恥ずかしさと情けなさを覚えた麗子は、ふっと鼻で笑い、諦めたようにため息を漏らした。ずっと正していた姿勢を崩して、ソファーにその身を沈めた。

そのとき、頭を下げたままだった真が、さらなる告白をする。

「彼女とは二年前から……浮気だから、いけないことだとはわかってただけど……でも、今はもう浮気じゃないんだよ。本気……なんだ。彼女に……彼女が、妊娠したんだ。俺の子なんだ。だから、その……結婚、しようと思ってる。しなきゃいけないし、したいとも思ってる。言い訳したくないからさ、これ以上嘘を吐きたくもなかったし、だから、ちゃんと話しておこうと思ってる……麗子、おまえには悪いと思う。本当に悪いと思ってる。でも、そういうことだから……だから、別れてほしいんだ。別れてくれ！　ゴメンツ！　本当に、ゴメン……！」

……頭の中が真っ白になった。

「……」

無言。

麗子は、ソファに沈んだまま、動けなくなった。声のひとつも出せない。なにも考えられなくなった。ただ、テーブルの上の、手をつけていないコーヒークップを見つめている。顔を上げられず、ましてや、真と目を合わせられない。

頭の中も心の中もグチャグチャしていて、気持ちが悪い……。

（浮気が、本気……彼女……妊娠……嘘……別れて……）

それらの断片的な言葉を繰り返し、繰り返して、ようやく理解しかけたとき、真が席を立ち、ポケットから取り出した小銭をテーブルに置いた。

「……ゴメン……」

その言葉を喉の奥から絞り出すと、その場を後にし、真っ直ぐ出口を目指した。一度も振り返らず、扉を開けて外へと……。

そのときに鳴ったベルの音は、妙に切なかった。

……麗子がカバンに手を伸ばしたのは、それから、しばらくのことだった。

サイフを取り出して、千円札一枚を、裏返しに置かれている伝票の上に置いた。すぐに席を立ち、サイフとカバンを両手に抱え、出口を目指す。

客と、マスターの視線を受けながらカウンターの前を通ろうとしたとき、ふとなにかを思い出したようにその足を止めた。

「コーヒー、美味しかったです」

精一杯の作り笑顔を浮かべ、マスターにその言葉を送ると、麗子はまた歩を進めた。

麗子が顔を正面に戻したとき、マスターは見た。彼女の顔がくしやりと歪むのを……。

マスターは一番奥のテーブルに目を移し、麗子のために入れたコーヒーが一切手を付けられていないまま残されてあるのを知った。そのとき、ベルの音がしたのでまた目を移し、ちょうど店を後にする彼女の後ろ姿を見つめた――。

丸まり、小さくなった背中に“黒い靄”のようなものが見えた。

「！」

マスターはハツとし、あらためて麗子の背中を見つめるも、扉の前を離れたため、姿が見えなくなってしまった。彼は急ぎ、彼女を追いかけた。

駅の方角へとぼとぼと歩いてゆく麗子。肩を落として、見るからに憔悴している彼女の後ろ姿を見つめると、マスターはずっとかけ続けていたサングラスを外し、なにも通さず、裸眼の状態であらためて見た。

黒い靄が見える。さっきはほんの一瞬のことで不確かだったが、今ははっきり見える。麗子の身体にまわりついており、その身を覆い隠さんばかりだ。

すると、マスターの表情が悲しみの色に染まった。まるで、大事ななにかを失くしてしまったようだ。

前から人がやってくるのに気づき、すぐにサングラスをかけた。そのときに垣間見えた彼の眼は――瞳の色は赤かった。血のような鮮やかな色をしていた。

サングラスで眼を隠し、遠のいてゆく麗子から視線を逸らした。店内に戻るべく、開けたままにしてあった扉に手を伸ばしたとき、マスターはぽつりと呟いた。

「……さようなら……」

ベルがまた、切なくて哀しい音色を奏でた。

(3) (後書き)

いかかでしたか？ 楽しんで頂けましたら、幸いです。
様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら
助かります。あと、とっても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2686z/>

LIFE AFTER DEATH ～死後の人生～

2011年12月10日05時50分発行